二〇二五年度

B国語問題

注意

一　試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。

二　解答用紙はすべて**黒鉛筆または黒のシャープペンシル**で記入することになっています。黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）

三　この問題冊子は**20ページ**までとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は**一**～**三**となっています。

四　解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に**氏名**のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。

五　解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。

六　解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。

七　この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

一　マークは、左記の記入例のように黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。

二　一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。

三　訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1 ○ 2 ● 3 ○ 4 ○ 5

（3と解答する場合）

一　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（**解答**はすべて**解答用紙**に書くこと）

見ることと知ることとは屢々違う。一致すればこれより幸なことはない。しかし往々その間に縁が切れてしまう。仕事の性質によってはこれでも差し支えはない。がひと度美学や美術史のような仕事になると、この二つのものの絶縁は又とない悲劇になる。こんなことは当然のことだが、案外この悲劇が省みられていないのは不思議である。似た例はいくらも挙げることが出来よう。信仰を味わぬ者が、信仰について詳しい理論を有したとて、結局は一物を欠いてしまうであろう。そんな信仰論に権威は出まい。例えば不道徳な倫理学者があるとする。たとえその学者が卓越した頭脳の持主であったとしても、彼の学説に最後の信頼が置けるであろうか。活きた真理について何も掴むところがないであろう。だがこんな種類の悲喜劇の中で、最もこまるのは美に携わる者の場合である。私は有名な美学者にして、少しも美の見えぬ人の数々を知っている。私は彼等の学問を信用しない。(1) 彼等は美学の学者であろうとも、美学者ではない。哲学の学者と哲学者とは区別されてよい。歴史に詳しい人を必ずしも歴史家と呼べないのと同じである。

しかし反対に次のように言えるかも知れない。美しさを見たとて、美しさについて知るところがなければ不完全ではないかと。知るところが乏しければ、全く見ているとは言えないではないかと。ソクラテスは行うことと知ることとを、つきつめてこのように一つに観じた哲学者であった。［a］ことと、［b］こととの完全な共同は、真に望ましい境地だと思える。しかし現実はこのように見事には働かない。人間はどちらかの力に余計傾いてしまう。［c］ことが主か、［d］ことが主か、残念ながら多くの場合、二つの流れに分れてしまう。しかし後者の悲劇は前者のそれよりも、もっと致命的である。美に関する限り、見る力の乏しいことは、美への理解の根本的基礎を失ってしまう。ただ頭脳がよいからとて美学者になることは慎むべきであろう。美について詳しく知るだけでは、美学者の資格にならぬ。

私の考えでは「見ること」と「知ること」とは内外の関係であって、左右の関係ではない。寧ろ上下の位置にあるものであって、対等のものではない。美への理解においては直観は理知より、一層本質的なものである。

観るよりも知ることを先に働かす者は美に触れることは出来ない。見る力は内に入ってゆくが、知ることは周囲を回ることに過ぎない。美への理解には分別より以前に働く直観の力がなければならない。本質的なものによく触れ得るのは直観であって理知ではない。かかる意味で見る力は、知る力よりも、もっと本当の理解を有っているとも言える。説くことが出来なくとも、真理に通うものが更に多い。

美は一種の神秘であるとも言える。だからこれを充分に知で説き尽すことは出来ないであろう。(2)知り得る範囲のものは、深さに乏しい。かくいうと美学を否定するようにもとられるが、丁度アクィヌス(注)が言ったように、「神について何も知ることは出来ないという言葉ほど、神について知っている言葉はない」とも言える。アクィヌスは中世時代随一の知者であった。だから彼は彼の知が神の前に如何に愚かであるかを熟知していたのである。自己の知の貧しさをよく省みることの出来た彼ほどの知者は当時他になかったのである。彼は神学者として名が聞えるが、それより信者としての彼は尚偉かったと思える。この事実がなかったら、彼は平凡な知者に過ぎなかったであろう。

見ずして知る者は神秘を知らない。仮に美の内容が知によって精算されたとして、示されるものが果して美であろうか。きれいに割り切れる美は、深い美であろうか。高の知れた美だと言えないであろうか。美学者は彼の美学を知識の上に置くだけではいけない。否、それ所ではない。知ることから見ることを導き出そうとしてはいけない。それは［ e ］だからである。

試みに一つの花を手にとろう。私たちは活きたその花を分析して、花弁や雄蕊や雌蕊や、花粉や、その他に分けて標本に作ることは出来る。だが一旦分けたそれ等のものを、繋いだとて、もとの活きた花にはならぬ。(イ)ドウ

タイを静体に移すことは出来る。しかし静体はもはやドウタイに戻ることが出来ぬ。死んだものは活きたものに甦(よみがえ)って来ない。それと同じことである。見る働きを知る働きへ移すことは出来る。しかし知ることから見ることを導き出すわけにはゆかぬ。直観は知識に移せても、知識から直観を生むわけにゆかぬ。だから美学の基礎は概念であってはならぬ。美学者に見る力がなくば、美学に携わる根本の力を欠いてしまう。少くとも権威ある美学者になることが出来ぬ。しかしこの世には如何に直観に乏しい美学者が多いであろう。

幾らもある例である。一枚の絵の解説を、かかる美学者や美術史家が書くとしよう。もし彼が直観の人でなかったとすると、直ちに彼の解説に一つの顕著な傾向が現れてくる。第一彼は彼の前にある一幅の絵を必ずある画系に入れて解説する。(3)ある流派の作に納めないと、彼は不安なのである。絵はきれいに説明のつくものでなければならない。だから筆者・年代等の探求は何をおいても彼の重要な任務となる。彼は彼の知ですべてを説明し尽す時に満足を覚える。彼は彼の解説に不明な神秘を残すことを極度に恥じる。人はこれを学者的良心と呼ぶ。しかし省みると、それ以外に仕事がないからではないであろうか。又それ以上に仕事がないからではないであろうか。それっきりで果してよいものであろうか。又それで美の理解として足りるものであろうか。

彼の文章はここでいつもある特色を帯びる。例外なく私たちが逢着(ほうちゃく)する事柄は、彼がその絵の美しさを現すために、如何に形容詞に苦心するかにある。言葉は屢々大げさであり、又字句は異常であり珍奇でさえある。しかもその言葉数が極めて多量である。彼は形容詞の(ロ)タイセキなくして美を暗示することが出来ない。これは彼の解説のまごうことなき特色である。

だがなぜこういう性質がいつも現れてくるのか。結局美への認識を概念で組み立てようとするからである。知ることで見ることに換えようとするのである。知ることで説こうとするから概念に訴えるより仕方がない。苦心する形容詞は概念の要求である。それは感じられた説明ではなくして、知られた解釈に過ぎない。感じが乏しい故に、強いて形容を重ねて感じを装うのである。(4)感じが波々と溢(あふ)れれば、形容詞で造り上げずともよい。それは

言葉を越えた言葉を求めるであろう。形容出来るような美は、寧ろ深く感じられた美とは言えないであろう。

（柳宗悦『「見ること」と「知ること」』による）

（注）　アクィヌス――トマス・アクィナス。イタリア出身の神学者（一二二五頃～一二七四）。

問

(A)　線部(イ)・(ロ)と同じ漢字を含むものを、左記各群の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

(イ)　ドウタイ

1　イフウドウドウ　　2　シュドウケンを握る　　3　心のドウヨウをおさえる

4　太鼓のドウを叩く　　5　家内ロウドウ

(ロ)　タイセキ

1　落ち葉でタイヒを作る　　2　業務がチタイする　　3　寺社をゾウタイする

4　契約のフタイジョウコウ　　5　植物にギタイする昆虫

(B)　線部の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C)　線部(1)について。ここで言う「美学の学者」とはどのような者か。句読点とも二十五字以内で説明せよ。

(D)　空欄 a 、 b 、 c 、 d に入る語の組み合わせとして最も適当な組み合わせを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　a知る　b行う　c見る　d知る

2　a知る　b見る　c知る　d見る

3　a見る　b行う　c見る　d知る

4　a行う　b知る　c知る　d見る

5　a見る　b知る　c見る　d知る

(E) ――線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 知識に基づく解説は、美とは何であるのかを画一的に捉えている。
2 直観に基づかず理論にのみ依拠する美の理解は、均衡を欠いてしまう。
3 知識を重ねるだけでは、美の表層をなぞるに止まり、その内実に届かない。
4 理知に頼った美の理解は、却って神秘的で不完全なものにとどまっている。
5 既知の範囲内で美を理解しようとすると、新しい知見は獲得できない。

(F) 空欄 [e] にはどのような言葉を補ったらよいか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 手段の目的化　2 本末の転倒　3 理論的な矛盾　4 知識の誤用　5 主客の絶縁

(G) ――線部(3)について。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 自分は見る力が乏しいために、絵の解説を十分に書けないのではないかと懸念しているから。
2 見ることと知ることの双方を兼ねそなえた理想的な解説は、現実には困難だと知っているから。
3 絵画の作者や時代など、調べ尽くさなければ美を理解したことにならないと考えているから。
4 画系や流派のような学問的に不確実な枠組みに依拠するほかに美を捉える方法を知らないから。
5 きれいに整理された解説を尽くすことが、真の美の理解ではないことに内心気がついているから。

(H) ――線部(4)について。ここでは筆者のどのような考えが反映されているか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 美は直観という説明し切れないものによって捉えられる。
2 美は感性的なものだから、その理解には知識を必要としない。
3 美は視覚的であるゆえに、論理的な言語とは結びつかない。
4 美はすべてを語り尽くさずに想像の余地を残すことが重要だ。

5　美は超越的な精神性によってのみ、理解することが可能だ。

※　大問二については著作権の関係により掲載できません。
引用した文章は次の通りです。

・大問二　藤田政博『バイアスとは何か』

三　左の文章は、『源氏物語』の「関屋」の巻の一節で、妻の空蟬（女君）とともに東国での任を終えて上京する常陸守一行と、石山詣でに出かける光源氏一行とが、逢坂の関で偶然すれ違った数日後、石山から帰京した光源氏が空蟬の弟（佐）を呼び寄せる場面から始まる。その昔、空蟬は光源氏との一度きりの秘密の逢瀬を持ったものの、人妻ゆえに光源氏からの求愛を拒み続けていて、その間、空蟬の弟が二人の間を行き来して手紙を運ぶ役目をしていたことがあったが、その後は十年以上も音信不通の間柄になっていた。これを読んで後の設問に答えよ。（**解答**はすべて**解答用紙**に書くこと）

佐召し寄せて御消息あり。今は思し忘れぬべきことを、心長くもおはするかなと思ひゐたり。「一日は(1)契り知られしを、さは思し知りけむや。

A　わくらばに行きあふみちを頼みしもなほかひなしやしほならぬ海（注1）

関守（注2）の、さもうらやましく、(2)めざましかりしかな」とあり。「年ごろの途絶えもうひうひしくなりにけれど、心にはいつとなく、ただ今の心地するならひになむ。すきずきしう、いとど憎まれむや」とてたまへれば、かたじけなくて持て行きて、「なほ聞こえたまへ。昔には（注3）すこし思し退くことあらむと思ひたまふるに、同じやうなる御心のなつかしさなむいとどありがたき。すさびごとぞ（注4）用なきことと思へど、え［　　］すくよかに（注5）聞こえかへさね。女にては負けきこえたまへらむに、罪ゆるされぬべし」など言ふ。今はましていと恥づかしう、よろづのことうひうひしき心地すれど、めづらしきにやえ忍ばれざりけむ、

B　「逢坂の関やいかなる関なれば繁きなげきの中をわくらむ

夢のやうになむ」と聞こえたり。あはれもつらさも忘れぬふしと思しおかれたる人なれば、をりをりはなほのたまひ動かしけり。

かかるほどに、この常陸守、老の積もりにや、なやましくのみして、もの心細かりければ、子どもに、ただこの君の御事をのみ言ひおきて、「よろづのこと、ただこの御心にのみまかせて、(3)ありつる世に変らで仕うまつれ」

とのみ明け暮れ言ひけり。女君、心憂きすくせありて、(4)この人にさへおくれて、(5)いかなるさまにはふれまどふ(注6)べきにかあらむと思ひ嘆きたまふを見るに、命の限りあるものなれば、惜しみとどむべき方もなし、(6)いかでかこの人の御ために残しおく魂もがな、わが子どもの心も知らぬを、(7)とうしろめたう悲しきことに言ひ思へど、心にえとどめぬものにて、(8)うせぬ。

（注）
1　わくらばに――偶然に。
2　関守――関所の番人のこと。ここでは、空蟬を守る番人として、夫の常陸守のことを喩えている。
3　昔にはすこし思し退くことあらむ――昔よりも光源氏が自分を少し疎んじていらっしゃるところがあろう。空蟬の弟は、四年ほど前に権力を失っていた光源氏から離反したので、そのことで光源氏から疎まれていると推量している。
4　すさびごと――男女の慰み事。
5　すくよかに――そっけなく。
6　はふれまどふ――落ちぶれて途方にくれる。

問

(A)　〰〰線部(ア)～(ウ)は、それぞれ誰の動作・行為か。最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1　光源氏　　2　空蟬　　3　空蟬の弟　　4　常陸守　　5　子ども

(B)　――線部(1)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　あなたとの逢瀬が改めてなつかしくなった
2　あなたとの約束を忘れていたことを思い出した
3　あなたが私を忘れていないことがわかった

4　あなたとの縁の深さが自然とわかった
5　あなたの運命を理解することができた

(C)　Aの和歌の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　「わくらばに」は「行き」の枕詞で、偶然にすれ違ったことの驚きの気持ちを伝えようとしている。
2　「ゆき」に「行き」と「雪」を掛け、道中、降ってきた雪のせいでお互いに苦労したことを詠んでいる。
3　「あふみち」に「近江路」と「逢ふ道」を掛け、期待していたのに逢えなかった無念の胸中を訴えている。
4　「かひなし」は「甲斐なし」の意味で、逢う約束が果たされなかったので甲斐がなかったと言っている。
5　「しほならぬ海」とは塩分を含まない淡水湖のことで、ここでは都の西にある広沢池のことを指している。

(D)　――線部(2)から読み取れる気持ちとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　しゃくにさわる気持ち
2　賞賛したい気持ち
3　眠れない程つらい気持ち
4　喜ばしい気持ち
5　悲嘆にくれる気持ち

(E)　空欄□に入る係助詞を記せ。

(F)　Bの和歌の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　「逢坂」の「逢」に「逢ふ」を掛け、その名の通り光源氏と逢えた関所だったことの喜びを伝えている。
2　逢坂の関はどのような関かと思っていたら、木が繁っていて通り抜けにくい関だったと言っている。
3　光源氏と逢えなかったのは、関所の番人のように自分を守って監視する夫のせいだと訴えている。
4　光源氏とすれ違っただけだったことを悲しく思い、本当に再会できるようにと逢坂の関に祈っている。
5　「なげき」は「嘆き」で「き」に「木」を掛け、繁る木をかき分ける如(ごと)く嘆きを重ねる憂いを詠んでいる。

(G) ――線部(3)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 かつての世の中
2 昔の生活
3 私が生きていた間
4 前世
5 本来の夫婦仲

(H) ――線部(4)を漢字に改めよ。（ただし、楷書（かいしょ）で記すこと）

(I) ――線部(5)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 気後れがして
2 愛情が足りなくて
3 裏切られて
4 しいたげられて
5 取り残されて

(J) ――線部(6)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 どうしてこの人のために私の魂を残しておくことができようか
2 なんとかしてこの人のために私の魂をこの世に残しておきたい
3 なぜこの人のために私の魂をこの世に残したいのだろうか
4 どう考えてもこの人のために残しておく魂はないのだろうなあ
5 どうしたらこの人のために魂を残しておく方法がみつかるのか

(K) ――線部(7)の現代語訳を五字以内で終止形で記せ。ただし、句読点は含まない。

(L) ――線部(8)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 忘れた。
2 諦めた。
3 出家した。
4 失踪した。
5 亡くなった。

(M) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 光源氏は、音信不通だった空蟬に対して手紙を贈ることを恥ずかしがっていた。
ロ 空蟬の弟は、空蟬に対して、光源氏への返事を書かないほうがよいと説得した。
ハ 光源氏は、空蟬と和歌のやりとりをした後も、時々空蟬に対して手紙を贈った。
ニ 常陸守は、大切な我が子を愛情込めて世話してほしいと空蟬に託した。
ホ 常陸守の子供たちは、父の言う通り、空蟬に対して心配りをした。

【以下余白】